

# 快 漕 III

下諏訪レガッタ30周年記念誌



下諏訪町漕艇協会

下諏訪レガッタ30周年記念事業実行委員会



特別企画 青木町長と歴代下諏訪町漕艇協会会長による座談会

## 敦子の部屋

### 《下諏訪レガッタへの想い》

#### 歴代下諏訪町漕艇協会会長

初代会長	河西 孝雄 氏	(S59.10 ~ H06.6)
2代目会長	奥村 守司 氏	(H06.6 ~ H11.8)
3代目会長	久保田一司 氏	(H11.8 ~ H22.3)
4代目会長	西村 和幸 氏	(H22.3 ~ 現 )

ゲスト	青木 悟 下諏訪町長
司 会	高橋 敦子 (記念誌部会副部長)

#### 高橋：

こんにちは、本日は、下諏訪町漕艇協会設立よりの30年を支えた4人の会長さんたち、そしてやまびこ国体には選手として、それ以降はボート協会の中心としてご活躍された青木町長にお集まりいただきました。お忙しいなか、ありが

とうございます。早速ですが、初代会長の河西さんに伺います。「昭和53年に行われたやまびこ国体のために造られた下諏訪町漕艇場を活用して、ボート競技を湖周市町村民に愛されるスポーツに」との思いはこの30年で結実したとっていいのでしょうか？

#### 河西：

諏訪湖でやまびこ国体のボート競技が行われた後の漕艇場。はえ一話が、国体の遺産だね。これをどう活用しようか？ということになって、町民がボートってえ言うあまりなじみのないスポーツに親しめるような大会をやるうじゃない



かって話になったわけせ。だが、蓋を開けるまでは心配だったね。参加してくれ



河西孝雄

るところがあるんだろうか？クルーがいったい幾つできるだろうか？そして、当日を迎えたら、今流行の言葉でいう「想定外」なことになった。出漕クルー36クルー、波もないグッドコンディション、お祭りみたいな楽しい大会になった。そして第2回は65クルー、第3回は83クルーと出艇クルー数も順調に伸びて、運営側の不安は払拭され、張り合いと自信につながった。ボート競技は専門家だけのものではない。母なる湖、諏訪湖がもたらしてくれる、みんなをひとつにしてくれるスポーツになった。それが、諏訪湖浄化にもつながったと思っている。30年の間にコースの整備も進められ、波消しができ、湖岸もさらに整備が進んだ。出漕クルーも勝負にくるクルーと、湖岸での親睦会も含めて仲間作りと

しての大会参加クルーとに二極化してきた。そのどちらも楽しめるそんな大会になった。町関係者、そして県漕艇協会にもそれはずいぶん助けられた。感謝の気持ちだね。

**高橋：**

なるほど。では2代目としてバトンを引き継いだ奥村さんですが、特に印象に残った大会などはありますか。確か奥村会長の時に難産の末、大会運営のあり方（下諏訪スタイル）が構築されたと記憶していますが、いかがでしょうか。

**奥村：**

いや、むしろ、私は低迷期（もがき苦しんだ時期）の会長と言っているんじゃないかな？右肩上がりだった大会参加クルーが減少してきてしまった時期。アンケートをとって、希望のあったミックス（男女混合クルー）やシニア（漕手の平均年齢50歳以上）の区分をつくって開催したのが、たしか平成8年だったと記



奥村守司

憶しています。みんなで楽しめる大会をめざして、暗中模索の時代ですね。ボート協会の会長は何もしなくて良いはずだった。一番つらかったのは(秋田県)本荘市（現：由利本荘市）との交流レガッタをお断りしに行ったときだね。本荘の人は、本当に下諏訪からのクルーを熱烈歓迎してくれたから、交流レガッタを止めて全国大会での交流に集中していきましょうという提案はつらかった。なんで、そんな嫌な役割を自分がと思いましたね。本荘市までの道が長かった、いろんな意味で。まさしく町漕艇協会会長は何でも屋。大会当日の交通整理までやったからね。いろいろな思い出があって語りつくせんよ。

**高橋：**

ここで、どうしても久保田さんに伺いたいのは、下諏訪レガッタの運営と練習環境の整備が、中学校、高校の漕艇部の活動に大きな影響をもたらしたのだと私は思うのですが、いかがでしょうか。二葉高校の建て替えのために使った仮校舎を第二艇庫・第三艇庫として移築し、ローイングマシン等の練習場も整備したと思いますが。

**久保田：**

これらは、会長としてではなく、町の事業として関



座談会風景

わったものです。中古とはいえ、よく認めて頂いた。諏訪湖を望めるワイドビュー、あのマシンローイングの設置場所は練習する選手にとっては日本一だと思いますね。町民レガッタが始まった当時は環境整備なんてもんじゃない。艇がない、オールが足りない段階からだからね。そんななか、町からの支援を受けて少しずつだけれど、揃えられていったんだね。艇がそろったら次はその格納場所。雨ざらしの艇が痛んでいくのが忍びなかった。今の二階建てプレハブの前の艇庫はいずみ湖にあったプレハブの「研修の家」。さらにその前、そこにあったプレハブを今の艇庫南側に移動するときは、高校生が50人ほどでたかって持ち上げて、今の場所へ移したんだ。女の先生に子ども達になんてことをさせるんだって大目玉をくったことを、良く覚えている。やま

びこ国体以前、あの一連の艇庫の場所は、その昔、地主の先祖がだまされて買ったという沼地みたいな場所で埋め立てで陸地になった。艇庫建設のために仕事上、青木町長の命で、上司と二人で小千谷市の末裔を訪ねた。東大出の魚市場の長は大変な人格者で、公共のためならと、二つ返事で譲ってくれた。土地代は500万円。「思いがけないお金だ。兄弟に分けてやれる。」と喜んでくれた。うれしかったね。あの土地を譲



久保田一司

り受けることができ艇庫建設ができたことが現在のボート施設にとっては、正

に第一歩になった。

**高橋：**

西村会長さん。いままでの会長さんたちのお話を聞いて、生涯スポーツとしてボート愛好家が集う下諏訪レガッタの今後について、抱負を聞かせてください。

**西村：**

私も第1回からずっと関わりつづけてきて、今日みなさんのなつかしいお話を聞いて、「スポーツには環境作りが本当に大切なのだ」と思いました。会長を受けたとき、自分に課した課題は、体力作り仲間づくりを目的に集うボート人口の拡大、出漕クルー数の拡大、下諏訪レガッタで育ったクルーが全国交流レガッタでメダルにからめる活躍をしてくれたらうれしいし、毎年、下諏訪レガッタに出ることが目標でがんばってくれる人が一人でも増えたら、と考えています。5年、10年後もこんな形で个性的なクルーがいろいろ出てきてくれたら、それを私たちは支えていきたいと思っています。

**高橋：**

最後になってしまいました。青木町長さん、この30年をふりかえて、また全国ボートサミットの会長という立場から、下諏訪レガッタについてお話しただけですか？



**青木町長：**

歴代会長さんたちの座談会に加えていただいております。実は昨日まで、全国ボートサミットが開催された喜多方市に行っていたんです。全国に点在する漕艇場を持つ自治体から、実に26市町村から参加があったんです。そこでテーマ「レガッタ」とし



青木 悟

て2分間スピーチをしてもらってそれぞれの首長、教育長などの立場のかたが自分の言葉で、熱心にこれを語ってくれた。これは感動しましたね。下諏訪レガッタは30回を迎えるということ、これは市民レガッタとしては全国トップクラスの開催回数です。加えて自治体の職員の主体ではなく、協会の組織力、民間の力で運営できている。これは大きい意味がある。他の自治体は職員や時給を払ってアルバイトが運営に携わっているところもあるから。30回を重ねていくなかでは3世代にわたっての参

加もある。素晴らしい大会だと自信をもって言える。どこに出しても恥ずかしくない自慢の大会です。

**高橋：**

最後に30年は一つの通過点であって、今後もいろいろな場面で下諏訪町漕艇協会はスポーツ振興に大きな役割を担っていく必要があると思います。今後どんなふうに展開していくのか、期待や構想などありましたらお聞かせください。

**久保田：**

やっぱり、3世代という言葉が出たけれど、下諏訪レガッタでボートを楽しんだその家庭の子どもが、高校や大学で活躍している。家庭で、ボートの話なんかして、諏訪湖がつながり親子の夢ってえ感じがしていいねえ。

**高橋：**

そして求められるのが、岩本選手に次ぐ諏訪湖出身のスター選手ですかね。中・高校生の夢、下諏訪レガッタの選手があこがれとするような選手が出てほしいですね。

**西村：**

あと、今後の課題としては、開催日時の決定にとっても難渋すること。諏訪湖で開催される各種大会の合間をぬっての開催だから、毎年開催日が流動的になる。今後も1年1年、その年の諏訪湖スケジュールをみな

ら、いろいろな団体が湖上で共存できるように考えていきたい。そう思います。



西村和幸

**高橋：**

みなさん、本日は、お忙しいところお集まりいただきましてありがとうございました。これで、下諏訪レガッタ30周年記念の特別企画、「敦子の部屋<<下諏訪レガッタへの想い>>」は一先ず終了とさせていただきます。それでは、会場を移してのどを潤しながら座談会の反省をしましょう。 終

(平成23年7月3日  
於 おくむら旅館)



司会：高橋敦子